
好きになるまでの時間

京夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きになるまでの時間

【Nコード】

N2261Y

【作者名】

京夜

【あらすじ】

小さい頃からモテまくっていた御庄麻友。それが就職してからは5年、男性と付き合うこともなく仕事に専念していた。そんな麻友の新しい職場は役員秘書室。そこで将来の社長候補「松井博仁」の秘書として働き始めることになる。仕事は確かだが、俺様でSで強引な彼は、なぜか麻友のことを気に入りアプローチをかけてきた。かわし続ける麻友に、何度も迫ってくる彼。麻友は言った……「好きと言わせてみせて下さい」……。なかなか進まないラブのストーリー、ちよっとコメディです。 「勉強の神様は人見知り」のス

ピンオフ作品となります。こちらからでも楽しめると思いますが、
宜しければ本編からどうぞ。

昔はもてていました

御庄麻友>ミシヨウマユ<、26歳。

なぜか知らないけれど、幼稚園の頃からもてていた。

幼稚園年少の時に3人の男の子から告白されて、意味の解らなかつた麻友はそれぞれに良い返事をしてしまった。

問題が起きそうな状況にもかかわらず、仲の良い友達としてしか考えていない麻友の行動のせいで、結局は4人で仲良く遊ぶだけにとどまった。そして卒園と共に、その関係も終わった。

男の子達は泣きながら「麻友ちゃん、また遊ぼうね」と言ってくれたけれど、麻友には「そうだね」という以上の感慨はなかった。

小学生の時は、いくらか恋というものに興味と理解が出てきた。

漫画の影響とか、女友達との話のせいだけでも、告白してくる男の子の気持ちも勘違いせずに受け取れるようには成長した。

告白してくれた男の子は運動が得意だったり、人気者だったりして、恋には興味があつた麻友には断る理由もなく、幾人かと付き合つてはみた。

ただ当然だけど相手はまだ小学生で、自己中心的であつたり、どうしていいか解らない様子で、麻友の方が途中でそんな彼に飽きてしまう。

麻友から「別れましょう」と言うと、残念そうだけれど、どこかほつとしたような表情で皆んな別れを受け入れてくれた。

恋とか別れってこんなものかな、と麻友は思い始めていた。

中学生になると、年上から告白されることが多くなってきた。相手は高校生とか大学生が多かったけれど、一度は社会人ということもあった。けれどこれはさすがに「犯罪じゃないですか？」と口にしてしまい、すぐに関係は終わってしまったのだが。

二股をかけたことはないけれど、今ひとつ「好き」と言う思いが強くない自分というものに気づいていた。

付き合いと別れが多くて麻痺してきているのではないかと一抹心配にもなったが、そもそも初めから「好きで好きでしょうがない」という思いをしたことがないのだから、まだその時が来ていないのだろう、と自分なりに納得した。

高校1年の時に、それはやってきた。

席が隣の男の子のことが気になってしまった。しかも、彼にはすでに想い人がいる。

正直、振り向かせるのは簡単だと思っていた。気のあることを伝えて話を重ねていけば、情が出てきて流されてくるはず、と考えていたのだ。

しかし、彼は最後まで振り向いてくれなかった。

そして、その彼女と付き合い、結婚してしまった……。

もしも、彼が麻友のことを好きになっていたら、麻友も別れることなく応えて、いつかは結婚に行き着いたんじゃないか、と思う。

彼の子供を産んで、彼の仕事を支えて……それは淡いけど、とても幸せそうな未来予想図だった。

しかし、それはもう叶わない夢。

麻友にとっては初めての失恋であり、愛するというものが何なのかを、教えられたような出来事だった。

それからは恋愛というものに慎重に、大事にしてきたのだが、どうにも彼のような一生を遂げたいと思うまでにはいかない。残念で悲しいが、それからも出会いと別れを繰り返していた。

麻友は東京の大学を卒業をして就職をした。

麻友がよく行っていた街やビルをまるごとプロデュースしていた会社があつて、その会社に興味を持って調べ、就職活動を行ったところ無事内定をもらい、そのままそこに就職してしまった。

上場はしていないが不動産も多数抱え、全国的に大きな商業スペースやビルを手がけている大きな会社だった。麻友はその総務部から働き始めることになった。

ちなみに麻友は、この頃から恋愛をご法度とした。

仕事が楽しくて寿退職する気がさらさら無かったので、社内恋愛は仕事の邪魔とばかりに、かわしまくっていたのだ。

スタイルの良い体なるべく目立たないような服で隠し、整った顔立ちもあり特徴がないように化粧をした。髪はさっぱりと肩ぐらいにきり、申し訳程度にカールをかけていた。

ちゃんと女の子だけれど、相手に勘違いされないように。背が小さくて入職したということもあつてか、周りから可愛がられるくらいでそう大きな問題もなく2年が過ぎた。

仕事はしつかり、きつちりとこなした。今時の若い女の子としては珍しかったようで、惜しまれつつも3年目は営業へ異動になった。どうも仕事に認められたらしい、と麻友も気づいていた。

営業は、楽しかった。

天職かも知れないなあ、と思いつつ、プレゼンのための資料作りや相手側との会話が楽しくてしょうがない。

ちっちゃい奴がどんどん突っ込んでくる、と相手先にもけっこう可愛がってもらった。

こんな時は、女で良かったな、と麻友も思ったりもした。

営業の成績はいつの間にかトップにまで登りつめてしまいそうになり、慌てて他の人のサポートにまわることもあった。それがまた好印象にうつったようで、また評価が上がってしまった。

これまた惜しまれつつ、2年で次の部署へ異動となった。

それが今回の麻友の新しい職場。

「役員秘書室」だった。

上司との対面

役員秘書室。

社長と取締役、計4人しかいない経営者達のための秘書。

「――社長秘書って、何か淫靡な感じがするのは私だけではないはず……」。

麻友はそんな不届きなことを考えながら、セキュリティのかかったドアのインターホンを押した。

『はい』

「御庄麻友です。本日、役員秘書室に配属になりました」

『ああ、はい。今、開けます』

インターホンの声は男性だった。

程なくしてドアが開き、インターホンの声と思われる男性と向かい合った。

「待っていました。中に入って下さい」

「はい」

相手の男性は180cm近い身長に丸い縁無しメガネをかけていて、作ったような笑顔を崩さない。麻友は彼にホテルマンのような印象を受けた。

悪い人ではなさそうだけれど、本音が見えないと言うか……ある意味プロだなあ、と麻友は感じた。

「私が役員秘書室の室長をしています。春日圭一>カスガケイチ< と言います。今日からあなたの上司の一人となります。よろしく願います」

「こちらこそ、よろしく願います」

上司の一人、という言葉に違和感を感じたが、麻友は何はともあれ一礼した。

きつと、これから説明があるのだろう。

部屋はひとつの大きなフロアとなっていて、幾つかの机とコンピューターと資料の棚が並べられていた。

完全空調とセキュリティの入った出入口、それに簡単な飲食やトイレ、休憩する場所まである所を見ると、ここには重要な情報が詰まっていて、基本的には外に出ないで全てが済みますことができるようになっていたことが解る。

何というか、静かでぴりつとした緊張感が部屋に漂っていた。

「ここがあなたの机です。ロッカーは後で女性に案内させます」
「はい」

机は、室長のすぐ向かいの角。思っていたよりも良い位置だ。

「御庄さんには結婚されて退職した人の代わりを努めてもらいます。簡単に概略を説明しましょう」

室長は笑顔のまま、説明を続けてくれた。

役員は4人。

創業者であり、社長の 神原寿一>カンバラジュイチ<。年齢

は78と高齢だが、一人でここまで会社を大きくした有名な経営者だ。麻友も経済誌で見たことがある。

取締役は3人いて、一人は銀行からの監査役の人間でありここにはいない、とのことだった。

もう一人はいわゆる番頭さんで、創業の時から社長の右腕となつて働いている人。木島宗一郎>キジマソウイチロウ<、年齢も70歳とかなり高め。しかし、未だに社長からの大きな信頼を得ている実力者。

そして、最後の一人が 松井博仁>マツイヒロヒト<。年齢は一気に下がって42歳。若いながらもほとんど業績を伸ばしての役員入り。次の社長と噂されている人物だった。

「噂を聞いているかも知れないけれど」

室長の声のトーンが一段下がる。これからの話は内密に、という意味だろう。

「松井取締役は神原社長の息子さんではないか、と社内では言われています。これは双方が否定していますので噂の範囲を超えないのですが、次期社長に一番近いことは確かです。御庄さんには、この松井取締役の秘書になっていただきます」

松井取締役があまりにも早い出世をしたことに、実は社長の愛人の子供ではないか、という噂が広まったことがある。やっかみが元だろうと思い、麻友も本気にはしていなかった。

ただ、そんな大物の秘書を任されるとは想像していなかったため、麻友の身体に緊張が走る。

その様子を感じてくれたのか、室長は優しく言葉をかけてくれた。

「初めから全てができるとは思っていません。我々がサポートしますから、あまり緊張しないで下さい」

「はい。有り難うございます」

とは言え、今までとは勝手も違うだろうし、憶えることも山のようになりそうだ。慣れて楽しくなっていた営業の仕事を思い出して、麻友は少しばかり心のなかでため息をついた。

―― 私向きではないと思うのだけれど、会社がそう判断をしたのならしょうがないか。

麻友は気持ちを立て直し、覚悟を決めた。

「ではさっそく、その松井取締役に挨拶に行きましょう」

「はい」

いきなりの対面に、麻友はまだ心の準備が整っていなかったが、専属の秘書なのだから会わないわけにもいかない。

麻友は室長の後ろに付いて歩きだすと、すぐに目的地にたどり着いてしまった。

室長が扉をノックすると、中から返事が聞こえた。

「はい」

「春日です。失礼します」

室長が扉を開けて、そのまま中に入る。麻友も後ろに付いて、部屋の中に入った。

想像していたよりも広い部屋だった。

大きな机に質の良いソファ、壁には無数の資料が整然と並べられ、何故かジムで見るとような筋力トレーニング用の機械まで置いてあった。

そして椅子に座る、将来の社長候補……。

麻友はその顔を見て、もう一つの噂を思い出した。

彼は見惚れるほどに格好いい……と。

確かに、30代と勘違いするような綺麗で精悍な顔立ちは、力強さとどこことなく優しさが感じられる。

少し長めで柔らかな髪は自然体なのにきっちり計算されたように整えられ、体つきもスーツの上からでも鍛えられていることが解るほどしっかりしていた。

そして、若くして登りつめたただけあって迫力と言うかオーラがある。

瞳が澄んでいて、何もかも見通してしまいそうな視線をこちらに向けていた。

麻友も思わず見惚れてしまった。

そして同時に、

――一筋縄ではいかなそう。

麻友はそんなことを考えながらも、にっこりと笑顔で応えてみた。

そんな麻友の笑顔が意外だったのか、松井の眉がぴくりと動いてじっと見つめている。

―― ……何か変だった？

何故こちらをそれほど見つめているのか麻友には解らなかったが、何はともあれ笑顔を崩さずに見つめ返しておいた。

「松井取締役。新しい秘書で、取締役の専属になります。御庄麻友さんです」

「御庄です。よろしくお願いします」

麻友は深く頭を下げた。

相手は無言。まだ麻友のことをじっと見ていた。

「松井取締役？ 何か不都合でも？」

「いや……」

松井がようやく口を開いた。声まで、低く響いている。

椅子から立ち上がり、松井がこちらまで歩いてきた。

身長も高くて、185cmぐらいはあるか。麻友と比べると頭2つ分ぐらい違う。

「松井です。よろしく」

差し伸べられた手に麻友も手を伸ばして握手をしたが、その手はすっぽりと埋まってしまった。

―― 大きな手……………私の手が小さいからか。

「御庄です。こちらこそよろしくお願いします」

「うん。今日は一日、春日についてやり方を教えてもらってくれ。」

明日から早速宜しく」

「解りました。有り難うございます」

麻友は室長と共に一礼すると、すぐに仕事を再開した松井を邪魔しないように、静かに部屋を出た。

扉が閉まると共に、知らずに感じていた緊張感もほぐれてきた。

―― それにしても……。

凄い存在感と、見惚れるほどの容姿だった。騒がれるのも仕方がないだろうな、と麻友は思った。

そして、恐らくかなり強引で、完璧主義者。気合を入れてかからないと、信頼は勝ち取れなさそうだ。

苦手なんて言ってられない。

会社のこれからを決める重要な位置に立たされたことを理解して、麻友の中のスイッチが入った。

自分の机に戻り、隣に椅子を持ってきた室長に麻友は頭を下げる。

「室長、いろいろと教えて下さい」

「よし。じゃあいくよ」

秘書の仕事というのは、かなり多彩だった。

担当役員の一日のスケジュール、時間調整や段取り、場所の確保などは言うに及ばず、この会社だけでも知れないが、役員に同行して車の運転、食事の管理、会う相手の基本的な情報を伝えたり、会議のための基礎資料集め…… などなど。

どう考えても、一人では対応不可能な範囲と量だった。

「そのあたりは、ここに待機している秘書がいるから、助けあいながら進めればいい。何か困ったときはいつでも私に連絡するように」
「はい。有り難うございます」

さらに、いま進めている事業の資料や行われるはずの会議の資料、関係各社および重要人物の資料。

コンピューターの使い方、一日の流れ、細々とした決め事。

麻友はひとつひとつ手帳に要点を書きながら、さらに必要な資料を受け取っていくと、机の上はあつという間に埋め尽くされた。

――これを一日で理解して憶えろと？

さすがに麻友も啞然としてみると、室長が優しくフォローしてくれた。

「当然、今日一日で憶えられるわけじゃない。少しずつ経験をしながら憶えていけばいいし、足りない部分は私達がフォローするから心配しないように……ただ」
「ただ？」

室長は言いくそうにしていたが、麻友には続く言葉のおおよそ想像がついていた。

「松井取締役はかなり高度な要求をしてくるかも知れない」

「……そうでしょうね」

「全てを抱え込まないように。それだけは忘れずに」

「はい」

他にもいくつか説明があったが、室長も仕事が多い。あとは質問があったら聞きにきて欲しい、と言葉を残して自分の席へ戻って行った。すぐ近くだけだ。

―― さあ、やりますか。

負けず嫌いの麻友は、さっそく山と積まれた資料を分類・整理して、読み始めることにした。

優しい上司はSでした

夜10時過ぎ。

松井はその日の仕事をようやく終え、椅子の上で大きく身体を伸ばした。

「ふう……10時か」

取締役となると時間の拘束はない。早く帰れることもあれば、遅くなることもある。

ゴルフをしてそのまま帰ることもあるが、こうして会社で事務的な仕事に忙殺されることも少なくない。

接待で遅くなることも考えれば、松井にとって10時は遅い時間ではなかった。

荷物をカバンに詰めて上着を羽織り、どこかで夕食をとろうと部屋を出ることにした。

部屋を出ると、いつもは暗いはずの秘書室に明かりが見える。

「誰が残っているのか？」

通り際に中を覗くと、ひとりの姿が見えた。

あの娘は確か……。

「御庄」

今日紹介された自分の秘書。下の名前までは松井も忘れてしまっ

ていた。

松井の声に気づいて、麻友が振り向いた。

「取締役。お帰りですか？」

「ああ。まだ残っていたのか」

「はい。憶えることが多いので」

松井は中に入り、麻友の隣まで歩いて行き、手元の資料を覗き込む。

「……ああ、いま抱えているプロジェクトの資料か」

「明日の仕事に関わると思ったので」

確かに、明日はこのことに関わる会議と打ち合わせがあった。ただ、秘書がいきなり全てのことを理解している必要はない。

麻友が仕事に熱心なことは関心したが、遅い帰宅時間を心配して松井は声をかけた。

「仕事を頑張るのはいいが、女の子には遅い時間だ。もう帰ったほうがいい」

麻友はにつこりと微笑んで頭を下げた。

「有り難うございます。もう少ししたら区切りをつけて帰ります」

「そうするといい。夕食は大丈夫か？ 家まで送ろうか」

「お気遣い有り難うございます。夕食は取りましたし、遅くはなりませんので大丈夫です」

「そうか……」

松井がこうして女性に声をかけることは滅多に無い。

だから断られたことを何となく残念に思ったが、一生懸命頑張っている姿は松井にも微笑ましく映った。

松井が麻友を見下ろすと、頭のとっぺんにかわいいつむじが見える。

無意識に、松井は手を伸ばした。

かさっ……。

松井の大きな手が、麻友の小さな頭の上に寄せられた。

突然の感触に、麻友は思わず松井を見上げた。

「あまり無理するな」

「……はい」

松井は何事もなかったように乗せていた手を離し、そのまま出口へ歩き出した。

「お帰り、お気をつけ下さい」

「有り難う」

松井が振り返りもせず、手だけ振って出て行ってしまつと、秘書室はまた元の静けさを取り戻していった。

麻友は自分の頭を撫でてみた。

「……小さいせいか、頭を撫でられやすいのよね。それにしても、大きな手。」

頭を撫でられることは嫌いではない。

松井の手も温かくて、気持ちいいものでもあった。

最初に会った時は、その緊張感をまとったオーラから仕事に厳し

い人というイメージが強かった。

でも今のは、心遣いのできる優しい上司の態度だった。

どれが本当の彼の姿なのだろうか。麻友はぼんやりとそんなことを考えていた。

「さて、もうひと踏ん張りしますか」

考えていてもしょうがない。これからはずっと顔を突き合わせるのだから、すぐに解るだろう。

麻友は大きな深呼吸をして、もう一度資料とのにらめっこを再開した。

松井の仕事は思った以上に過酷だった。

スケジュールが分単位に刻まれていて、朝から晩までぎっしり詰まっている。しかも、それがしょっちゅう変更される。

会議が長引くのは当たり前。ちよつとした思いつきで行動を始めていたりするのに、残りの仕事もこなそうとするので、その時間をやりくりするのには思っていた以上の苦労をする。

残念ながら、最初はこうしたら良いか解らず、室長に何度も相談したり、手伝ってもらうしか無かった。くやしいが、今は学ぶしかない。

次に行く最短の経路を考えたり、間違えずに安全運転するだけでも一苦労で、会議の内容を理解したり、人の名前を憶えるのは麻友もしばらくの時間を要した。

意外に悩みになるのがお昼ご飯だった。

会社には社食があるが、そこで食べることができるのは週の半分ぐらい。残りは外で食べることになる。

しかし、時間が押せば押すほど、調整は昼の休憩を潰すしか無い。近い店で早く済ませるのでは、食事のバランスも何もあったものじゃない。コンビニのおにぎりを車の中で食べることも少なくなかった。

サプリメントを水と一緒に飲み、これでいいとばかりに松井は頓着した様子はないが、麻友としては気になって仕方がない。

ある昼は本当に時間がなかった。

松井を車に乗せたはいいが、すでに昼は過ぎていてご飯を食べる時間もなければ、買いに行く時間もない。

しかも、次の用事は夕方までびっしり予定が詰まっている。

松井も車の中で一休みをしようとお昼のことを考えてもいない様子だが、麻友はとうとう我慢が出来ず、自分のお弁当を松井に差し出した。

「？　なんだ？」

「私のお弁当です。時間が無いのでこれ食べて下さい」

麻友の言葉に、松井が首をかしげた。

「それを食べたなら、君の分が無くなる」

「いいんです。私は取締役を送り届けたら時間ができます。その時間に何か食べますから」

「……そうか」

断わられるかと思ったが、意外にあっさりと松井が弁当を受けてくれた。やっぱりお腹は空いていたのだろう。

後ろの座席で、弁当を開けるカチャカチャした音に続いて、遠慮

なくご飯を口に運ぶ音が聞こえてきた。

「ん、うまい」

「有り難うございます」

「料理、上手だな」

「一人暮らしが長いので」

「私も一人暮らしは長いが、料理はさっぱりだ」

松井の言葉に、麻友は小さく笑った。

美味しそうに食べる音を聞いているだけでも、麻友としては気分が良かった。

やっぱり渡して良かった……と思ったのはこの時までだった。

「美味しかった……しかし、足りない」

「はい？」

「明日から私の分の弁当も作ってくれ」

お願いでもなければ、選択でもない。

松井の言葉は命令だった。しかも。

「量はこの3倍で」

「さっ、3倍？」

麻友の声が思わず裏返った。

「身体の大きさを考えろ。これじゃあ、少なすぎる」

「はあ……」

「解ったな？ 3倍だ。明日から宜しく」

どうやら麻友に拒否権はないらしい。

啞然とする麻友を残して、目的地にたどり着いた松井はさつさと車を降りて出て行ってしまった。

座席を見ると、また元のように丁寧に袋に詰められ、空になったお弁当箱が置いてあった。

優しいかなと思っていた上司の化けの皮がだんだんと剥がれてきたようだ。

―― Sだ。ドSに違いない……。

麻友はハンドルを握りながら、これからの自分の境遇を想像して、深いため息をついた。

可哀想なんて思っくんじゃなかった。

この日から、ただでさえ少なくなっていた麻友の睡眠時間は、さらに30分減少した。

夕食の誘い

麻友の帰る時間は相変わらず遅かった。

ひとつできるよになると次を要求され、それができるようになると、また次の要求をされる。だから、本来の業務が終わってもそのための勉強であったり、下調べであったり、試行錯誤で帰ることができない。

「ドS上司……と呟くことはあるが、それほど理不尽な要求はされていないので、しょうがなく麻友も受けていた。」

松井の言うことは勉強にはなるし、成長にもつながる。

会社の全体が見えてきたし、いろんな人にも紹介してもらって今までにない人の繋がりもできた。

忙しいけれど、楽しい。麻友もそう思えてきていることは確かだった。

そして、遅くなっている麻友を、松井がよく夕食に誘ってくる。

「おい、御庄。夕食を食べに行くぞ」

「業務外です。お断りします」

「上司と部下が情報を交換して良いコミュニケーションを保つことは、業務内だと思うが？」

相変わらずドキッとしてしまうほどの綺麗な笑顔で松井が言うてくるが、麻友は何の抑揚もなく返答する。

「業務規則に載っていません」

「すべての業務を記載できるわけないだろう」

「……タイムカードを押してあるので、これは残業ではありません。ブライベートの時間です。私の存在は気にしないで下さい」

「頑なだな」

麻友は仕事を始めてから、男性と二人きりの食事を全て断っていた。恋に発展しないための大切な防御線と、麻友は考えていたのだ。複数人での食事だとしても、最後は二人つきりにならないように早々に切り上げて帰るなど、麻友は今まで徹底してきていた。それも自然に、あまり相手にダメージを残さずにやるのは結構な技術が必要だった。

そうこうしている間に、大体は相手も脈なしと諦めるのだが……この上司はDSの上になかなか引かない。

「――頑ななのはどちらですか?！」

麻友は心の中だけで愚痴った。

「前に言っていた、夕食は食べてある、というのは嘘だろう」

「確かに嘘ですが、取締役のお弁当を作るために帰ってから下ごしらえがあります。そのつまみ食いで十分にお腹が一杯になるのです」

事实は時として武器になる。麻友は、これでも誘いますか?、と視線だけで尋ねてみる。

松井は両手上げて、ため息をついた。

「いいだろう。今日は一人で寂しく食事をとるよ」

「取締役なら声をかければ、可愛い子が喜んで一緒にしますよ」

「誘ってみたが、駄目じゃないか」

「私は可愛くありません」

「可愛いさ、とても」

爽やかに断言されても、麻友はそれをさらっと流した。

「経理の須崎さんとか、総務の野島さんとか、企画の吉田さんとかどうですか？ 取締役のこと、少なからず思っている人達と思われませんが」

「誰でもいいわけじゃない。私はお前と一緒に食事をしたい、と言っているんだ」

告白のようにも聞こえる言葉を、麻友はあえて無視して続けた。

「私は明日のための時間が欲しいのです。あなたの役に立てるように、放っておいていただけると有り難いのですが」

「……解ったよ。邪魔した。お先」

「お気をつけて」

最近はこのやり取りを毎日のように繰り返していた。

相手を傷つけずに断り続けているはずなのだが、いい加減気づいて諦めて欲しい、と麻友も思わずにはいられない。

そんなある日、室長からこんなお誘いがあった。

「御庄さん、少しは落ち着いてきたかな。良ければ歓迎会を開きたいと思っているのだが」

「あっ、はい」

異動になってからだいぶ経つので、歓迎会などというものがあるとは思っていなかった。慌ただしい毎日ではあるが、わずか7名しかいない役員秘書室のメンバーとはすでに良く知った間柄になっていた。

社長付きの2名の秘書はほとんど会社にはいないため、麻友もあまり会ったことはないが、それは他の仲間も同じだという。何でも、社長が起きてから寝るまでを2人で世話をしている状態で、会社には寄ることもできないという。

それは秘書の域を超えているのでは……と思わないでもないが、どうも昔からの慣例とのこと。社長は仕事はできるが、何かと人の手の掛かる人らしい。麻友もまだ、顔を合わせたことはない。

だから、室長と麻友自身を除くと、秘書室のスタッフはたったの3名。

歓迎会を開くまでもなく、すでに仲も良くなっていて、麻友もいろいろ助けてもらっていた。

もちろん、どの人もみんな美人で頭がいい。

役員秘書の条件なのかな、と思うと麻友もちょっとばかり自分を誇らしく感じた。

「秘書室は女社会だからね。時には、食事会が必要だと感じているんだ」

確かに会社内ではあまり雑談もできない。特にこの役員秘書室は、お偉いさんばかりが行き交う場所で、噂もはばかれる秘密事項の塊。室長なりに息抜きが必要と感じているようだ。

「今週の金曜日。7時で予約をとっているから時間を開けておいて」「あつ、でもその時間までに仕事が終わるかは……」

普段でさえ、仕事は8時をまわることがほとんどで、そんな早い時間に切り上げる自信が麻友にはなかった。

しかし、室長はそのあたりのことも解っているらしい。麻友の言葉にうなずきながら、教えてくれた。

「松井取締役には、伝えてあるから。ちゃんと6時半には開放してもらえるはず。そのあたりのことは理解のある人だからね」

「―― さすが室長！ 段取りの抜かりはないなあ。あの人も、私には容赦無いけど、室長の言うことは聞くのね……」

最近朝が早くとも、夜が遅くとも、必要であれば休みの日でも松井は問答無用で麻友に付けてくるよう命令してくる。

「秘書なんだから当たり前だろう」

と言われるが、時間的に拘束のない役員と、労働基準法に守られている平社員と同じに扱わないで欲しい、と麻友は思う。逆らしいが。

久しぶりの飲み会だ。

「喜んでいかせてもらいます」

「主役なんだから、必ず出席して楽しんで下さい」

室長の笑顔は、いつでも優しい。

歓迎会

なのに、何故。

「取締役が私の横に座っているのですか？」

歓迎会の会場は高級中華料理店の個室という、何とも素敵なところだった。確かに綺麗な秘書の方々が好むお店と言ったら、こういう店の選択になるのかも知れない。

ただ、なぜ松井が麻友の隣に座っているのか……。

「招待されたから来たに決まっているじゃないか」

松井は相変わらず無駄なまでの整った笑顔で、そう答えた。

「室長、誘ったのですか？」

幹事であるはずの春日に聞いてみると、彼は苦笑いをしながらその時のやりとりを再現してくれた。

「『御庄さんの歓迎会を開くので、その日は6時半には仕事を終わらせてあげて下さい』とお願いしに行ったら、『解った。私も参加するから』と返事がありました」

「……招待されていないじゃないですか」

麻友がジト目で松井を見るが、まったくひるんだ様子がない。さ

すが俺様上司。

「何度食事に誘っても断るくせに、室長の誘いには一度でオツケーを出す御庄が悪い」

「私のせいですか?!」

思わず声を上げてしまった麻友に、春日が「まあまあ」となだめる。麻友も上司に対して大人気ない言動だったかなと反省して静かになったが、それでも明らかに松井のほうが悪いと思っていた。

ビールと前菜三種盛りが運び込まれた所で、室長が乾杯の音頭を取る。

「では、新しい仲間の御庄麻友さんを歓迎して、乾杯」

グラスを合わせるには席が離れているので、それぞれに唱和してグラスを掲げる。

隣に座っていた松井は麻友のグラスに当ててきて、麻友は一応笑顔で応えた。

「麻友ちゃん、お疲れ」

麻友の隣に座る秘書仲間、藤堂葵>トウドウアオイ< さんが声をかけてくれた。とても長い黒髪を後ろに束ねた、落ち着いた雰囲気美人さんで、麻友よりも4つほど年上。

彼女は特定の専属上司を持たない、秘書のための秘書のような役割を担ってくれている。だから、麻友も室長と彼女には本当にお世話になっていて、とても頼りになる優しい先輩だった。

「いつも有り難うございます」

「いえいえ、どういたしまして」

にこやかに微笑む優しい表情は、何でも受け入れてくれそうな深さがある。

麻友は松井のことを放っておいて、彼女に話しかけ始めた。

「今日は女の子だけで、上司の愚痴を話せるかと思って楽しみにしていたのに」

「そうねえ。確かに……」

麻友と葵は、ちらつと横に座る松井を見つめた。

松井は片眉だけ、わずかに上げる。

「私に愚痴があるのならば、直接言っただけいい。優しく接しているつもりだが？」

「あれで優しいんですか？」

「十分、優しいだろう」

「私を待たずにさっさと行っちゃったり、休みの日でも問答無用で呼び出したり、今まで自分がされていた仕事をどんどんこちらに回してきたり」

「……ためらいなく、言っただけ」

松井は苦笑いをしながらビールを飲んだ。コップ一杯がひと飲みで消えていく。かなりお酒には強そうだ。

「でも、松井取締役。今までの秘書の中で、御庄さんを一番可愛がっているように見えます」

落ち着いた声で話してきたのは、室長の隣に座る先輩秘書である鹿野百合子。シカノユリコ。番頭役の専属秘書で、秘書歴は

密かに室長よりも長い。年齢は不詳だけれど見た目は30代後半ぐらいで、恐らく実年齢はきつともっと高い。

和風美人を絵に描いたような人で、いつも髪をきれいに後ろにまとめている。

「あれで可愛がっているんですか?!」

麻友が思わず声を上げてしまうと、百合子がかすかに笑った。

「優しくとは言いませんが、今までの秘書達に対してはかなり遠慮されて接してこられていたことが良く解りました」

「つまり、今は遠慮がない、と」

「安心して御庄さんにぶつけている様子が、松井取締役からの信頼を感じます」

百合子の言葉に、松井は満足そうに頷いた。

「さすが、鹿野さん。よく見ている」

言われた百合子も満足そうに微笑んでいたが、麻友の方は納得できない。

「信頼をしていただけるのは有り難いのですが、私もか弱い新人の女の子です。遠慮や優しさはあって欲しいです」

このままでは睡眠不足が解消されない。肌荒れ対策としても、このあたりは何とかしたい、と麻友も感じていた。

取り合ってもらえないだろう、と諦めつつも呟いた言葉に、意外にも松井は真剣な表情で答えてくれた。

「お願いをしたことを、御庄はいつも予想以上に覚えてくれる。私もついつい、まだできるかな、と期待してやり過ぎているところはあるかも知れない。加減が解らないんだ」

「―― あら、意外な優しさ。……そう言われると弱いよね。」

「……………まあ、出来無いことはないですし、理不尽だとは思っていませんから……………」

そう。松井のお願いしてくること、大変だとは言っても麻友にとつてためになることが多い。松井の言うままに覚えて憶えていくうちに、他の会社の経営者達とも顔馴染みになってきたし、会社の指針・方向づけと言うものの深さも理解しつつある。

これは麻友がいくら頑張ったとしても、一生経験することのできない出来事だったと思っている。

松井は嬉しそうに笑うと、麻友の頭を大きな手で撫で回した。

「有り難う、御庄。信頼しているよ」

「子供じゃありませんので。頭は撫でないで下さい」

「視線がどうしても頭のとっぺんになるんだ。御庄のつむじを見ていると、ついつい撫でたくなる」

「私は小動物ですか」

「……………近いな。ワンコかな」

「―― 犬ですか。気が合いませんね。私は猫派です。」

「うわあ、そんなラブラブな松井取締役、見たこと無い。麻友ちゃん、気をつけてね」

松井の隣に座る、もう一人秘書仲間、倉敷佳奈>クラシキカナ
< が話に入ってくる。彼女は銀行からの監査役の専属秘書だが、
あまり会社には来ない上司なのでやはり秘書室にすることが多い。
麻友と同一年で、茶色の短い髪がふわふわしている、とても可愛
らしい女性。元気の塊のような明るさがあるが、仕事も抜群にでき
る。

「ラブラブと言うか、からかわれているだけののような気がします、
いつでも十分に気を付けています」

「鉄壁の防御線を引かれていますよ」

「取締役、以前はかなり遊んでいたらしいですからね」

佳奈の言葉に、麻友は大きく頷いた。

「やっぱり」

「やっぱりってなんだ。……若い時は少し遊んだかも知れないが、
もう昔のことだ」

「知らないことを言うな、と松井が視線だけを送ると、「ああ怖！」
と佳奈はおどけたようにつぶやいて、小さく舌を出す。
それを見て、麻友も笑った。

Sの上司に勝てました

松井がいたものの美味しい料理とお酒もあつて、食事は楽しく過ぎていった。

松井もその後はそれほど麻友に絡むこともなく、室長と真面目な話をしている。

麻友も女性達だけで、昔の出来事や恋の話などで盛り上がっていた。

佳奈が聞いてきたのは、そんな自然な話の流れからだった。

「麻友ちゃんは、付き合っている彼氏とかいるの？」

隣の松井の意識が不意にこちらに向かってきたことに気付いたが、麻友は気にせずに話を続けた。

「いませんよ。今は仕事が楽しいし、私は仕事を続けていきたいので」

佳奈は頷いてくれたが、百合子の意見は違った。

「仕事を続けたままでも、恋はできるわよ」

彼女は結婚していて、子供も二人いる。説得力のある言葉だ。とは言え、麻友の考えは別だった。

「今は仕事が忙しいのもありますし。……少なくとも社内恋愛は、

仕事を続けていく上で支障になると思っています」
「それは、頼もしいね」

松井が反応するかと麻友は思っていたが、答えてくれたのは室長だった。

ちらつと横を見ても、松井は表情も変えずお酒を飲み続けていた。

―― ところでそれ、何杯目ですか？

何となくいろいろと会ったことのないタイプだ、と麻友は心の中で思った。

歓迎会は特に大きな問題もなく、温かい雰囲気のままお開きとなった。

麻友も仕事にはだんだんと慣れてきた。

室長や他の秘書の人に助けてもらうことも無くなったし、松井からの要求も予想の範囲を超えなくなってきた。

ここに至るには数ヶ月を要したが、それでも早いほうだと室長は褒めてくれた。もちろん、松井からのお褒めの言葉は無かったが。

おっ、と思わしてみたい……麻友の心にふつつつとそんな思いが湧き上がり始めるが、それを狙おうとまでは考えていなかった。

それはある日、結果として現れた。

「少し時間が開いたな。御庄、一緒にお昼でも食べるか」

夕食を誘うことを諦めた松井が、最近はお昼と一緒にどうかと誘ってくる。今までは社食で他の社員と一緒にすることが多かったのに、お弁当にしたせいで部屋でふたりきりで食べる機会が多くなってきた。

包囲網でも敷いてきているのかしら、と麻友も感じていたが簡単に突破を許す気持ちもない。

目の前の松井に、麻友は資料を差し出した。

「明日の企画会議の資料を作成しました。取締役も把握しておいた方がいいかと思ひまして」

松井の眉がわずかに上がる。麻友からの資料を受け取り、ぱらぱらとページをめくり簡単に目を通し始めた。

考えるように資料を見つめ、松井はまた麻友の方を見た。

「鬼」

松井は憎々しげに呟いて、資料を丸める。

どうやら読んでおいた方が良さそうと、判断したようだ。

「鬼でけっこうです。取締役には必要な知識と思ひまして。かき集めなので体裁は悪いですが、重要なところは解りやすいように印をつけておきました。……私は皆さんと一緒に昼はとりますので。お弁当はこちらです」

麻友がにっこりと微笑むと、松井はお弁当をかつさらうように持つて行き、自室へ歩き始めた。

「あ、お弁当箱は洗っておいてもらえると有り難いです！」

背中越しに伝えたが、松井は返事もせずに部屋の中へ入ってしまった。

多分これがささやかながら、麻友の初めての勝利だった。

次の勝利は、車の中での出来事だった。

「取締役。もしかして、名前とか忘れっぽくないですか？」

資料の読み込みとか、方針の決断とか、交渉力とか、麻友も感心するほど凄いかと思えば、松井は時折ぼろっと人の名前を忘れていたりする。

会っている人の数が多いので仕方が無いのかも知れないが、興味が無いことには記憶回路が働かないらしい。

「……まあ、そうだな」

松井は苦笑いをしながら、麻友の言葉を肯定した。

「これから会う方の説明でもしましょうか？」
「できるのか？」

「簡単なものなら」

「お願いしよう」

「解りました」

麻友は運転しながら、思いつくままに説明を始めた。

「今から会われるのは日本支社長の熊倉英太郎さんです。48歳で若いのですが、確か外車の販売会社からヘッドハンティングされた経歴があります。結婚されていますが、女遊びをしている噂を聞いたことがあります」

「……どこからそんな噂を」

「女の情報網です。全てが大切な情報ではありませんが、憶えやすいかと」

麻友の言葉に、松井が笑った。

「確かに。他には？」

「恐らく今日は、支店長が店内の案内をすると思います。佐々木美和さん、32歳。アルバイトから正社員になって、今では本店の支店長です。とっても綺麗な方で、勧める服のセンスがいいので、女性の方に何かプレゼントをする時には相談するのもいいかも知れません」

「なるほどね」

「バツイチ、独身です。どうやら彼氏とも別れたばかりのようで、今は特定の彼はいないようです。取締役、気に入ったならチャンスですよ」

「……どこから入るんだ、そんな情報まで」

「女の情報網」

「……………侮れんな」

松井は苦笑いを通り越して、ちよつと空寒い気持ちになった。

会社の概要から、どこまで交渉が進んでいるのか、他との競合も含めて、麻友は店につくまで報告を続けた。

麻友は周囲を確認しながら、ゆっくりと店の前で車を止めた。

「着きました」

車を止めて声をかけたのに、後ろから返事が無い。

振り返って見ると、松井は目を閉じて考え事をしているようだった。

「取締役？」

麻友が声をかけると、松井はようやくまぶたを開く。

軽く頷くと、車を出る間際にまた麻友の頭を撫でてきた。

「今日の話し合いのイメージができた。助かった。有り難う」
「撫でるのは止めて下さい。髪の毛が乱れます」

麻友の言葉を聞かないまま、松井は車を出て行ってしまった。
相変わらずのマイペースな上司だったが、どうやらこれが2勝目

となつたようだ。

夕食を一緒に食べませんか？

ただ次の勝負は、どちらが勝ったのか結果的には何とも悩ましい出来事だった。

それはとある日の会社でのこと。

滅多に会社にいない社長が自室にいて、しかも松井と一対一で話をしていた。

会議で二人が話しあうことはあったが、二人だけ、というのは麻友も初めての出来事だった。

一体何の話をしているのだろう……重要な話には違いないだろうが、その内容は麻友にも検討がつかない。

そんなことを考えていたら、松井が戻ってくるまでの時間が麻友にはひどく長く感じられた。

資料の作成をしていたがほとんど手につかず、麻友は松井の帰りを待った。

それから10〜15分ほどたって、松井は戻ってきた。

しかし、扉を開けて入ってきた松井は、見たことがないほどに疲れていた。

麻友に声もかけることもせず、自分の椅子に深く座り込む。

ため息はつかなかったが、どこか一点を見つめ続け、何か考え込

んでいた。

疲れている、でもそれを隠そうとしている。

いつも彼を見ている麻友でなければ気づかないぐらいには、松井はしっかりと演技をしていた。

でも、麻友は解ってしまった。
目とか、肩とか。

ほんの僅かな違いだけれど、それでも自信に溢れたいいつもとは違う。

「取締役……大丈夫ですか？」

麻友の問いかけに、少しだけ間を置いて、松井は何事もなかったかのように返答をした。

「ああ。大丈夫だ」

そう言われてしまつては、麻友もそれ以上は聞くことができない。
麻友は黙って、言葉を待った。

二人の間に、しばらくの静寂が続いた。

「御庄……」

「はい」

松井が何かを喋ろうとしたが、言葉は続かなかった。

松井はため息をついて頭を軽くふり、ふっ……と笑う。

それだけだった。

恐らく松井は、麻友に何かを伝えたかった。

でもきつと、気持ちを押さえ込んだ。

辛いことも、疲れることも、寂しいこともすべて心の奥底にしま
うことにしたようだ。

その松井の自虐的な笑いを見て、麻友はため息をついた。

4年間も守ってきたんだけど……。麻友は心の中で呟きながら、
自分の気持を確認していた。

好きかどうかは解らない。でもこれを放っておけるほど女を捨て
ちやいない。

――しょうがない。

麻友はにっこりと笑って、松井に声をかけた。

「取締役」

「……なんだ？」

「一緒に夕食でも食べますか」

麻友の言葉の意味を、松井はしばらく理解することができなかった。

「……今なんて言った？」

「だから、一緒に夕食でも食べますか？」

それでも松井はまだ思考が追いつかない様子だったが、たどたどしく返事はしてくれた。

「あ、ああ……そうだな」

麻友は微笑んで、携帯を開いた。

「では店の予約をします。今日の8時でいいですね」

松井はただ呆然と麻友の様子を見ていた。

麻友が店の予約を終えて、いつもの笑顔でにっこりと微笑むと、松井もようやく苦笑いを浮かべてくれた。

いつもの顔には程遠いが、それでも麻友をほっとさせる力のある表情だった。

眼下の星空

仕事を早めに切り上げ、ふたりはタクシーで店に向かった。

いつも大切な接待をする時に利用している店で、今では名前を告げるだけで部屋も料理も決めて待っていてくれる。松井にとっては慣れた店だった。

東京でも有数の高層ビルの、その最上階を全て使ったイタリアンレストランで、広い店内なのにいつもお客さんで賑わっていた。

二人はビルのエレベーターに乗り、長い浮遊感を感じた後に、目の階にたどり着いた。

チンという音と共に扉が開くと、レストランの入口とその奥の一面のガラスが見える。そのガラスからは、満天の星空と勘違いしそうな東京の夜景が広がっていた。

「お待ちしております。いつもの部屋を用意してあります」

「有り難う」

店のマネージャーがわざわざ出てきて、二人を案内してくれた。

正面の入口とは別の目立たない扉を開けて中に入ると、細長い廊下が続いている。足音も吸収してくれるような落ち着いた色合いの絨毯の上を歩いて行くと、その突き当たりの部屋にたどり着いた。

「どうぞ」

案内に従って中に入ると、角部屋の二方向が一面の窓ガラスになっていて、先ほど見えた夜景が眼下に広がっていた。

それはため息が出るほどの美しさで、静まり返った部屋の時が不

意に止まってしまったような錯覚に陥ってしまう。

中に入った麻友は、その光景に思わず立ち止まって見入った。

松井に手を引かれ、6人ぐらいは座れそうな大きな机の窓ガラス近くの席に、二人は向かい合わせて座った。

松井は慣れた席だが、麻友は中に入り座るのは初めてだ。それでも、麻友に緊張した様子は見られない。むしろ、どこかこの雰囲気を楽しんでいるようにも見えた。

松井が麻友のことを見つめると、麻友はいつもの穏やかな笑顔を浮かべた。

その笑顔を、松井は思わず見つめ続けてしまった。

しばらく静寂が続いたが、その沈黙を破ったのは松井の方だった。

「何故」

麻友は何を聞かれるのか何となく予想をしていたが、小首を傾げつつ話の続きを待った。

「一緒に夕食を食べようと言ってくれたんだ？」

松井は引き締まった腕を組み、いつもの澄んだ瞳をこちらに向ける。それは、嘘や偽りは許されない視線で、どこか緊張感もはらんでいた。

麻友は静かに答えた。

「今のままでは今後の業務に差し障りが出る、と考えましたので」

「……つまり、これも業務内と？」
「はい」

麻友がにっこりと微笑むと、松井は小さく笑った。

「もう少し、期待させるような返答が欲しいな。こんな時ぐらいは」

「どうだ？」と松井が目だけで問いかけてくる。どうやら松井もこの言葉のやり取りを楽しんでいるようだ。

それに対して、麻友もここは正攻法で行くことにした。

「取締役は、私のことが好きなんですか？」

麻友の問いかけに、松井は少しだけ目を開き、ずっと細めて麻友をじっと見つめた。

それは松井にとっても難しい問題だったようだ。答えるにはしばらくの沈黙を必要としたが、松井は正直に答えてくれた。

「まだ解らない……。こんな見てくれと、立場だ。今まで付き合いと言えば、割り切った関係だけにしてきた」

「遊んできたらしいですね」

「男だからね。嫌いじゃない」

静かなノックの後にお酒と料理が運ばれてきたため、二人の会話も一時中断した。

お酒はシャンパンで、スタッフの人の手で丁寧に栓が抜かれると、ぽんつと空気の抜ける音が部屋に響いた。

よく冷えているためか、ビンからは柔らかな白い煙がこぼれていた。

細長いグラスにゆっくりと注がれると、小さな泡が立ち上っていく。

注ぎ終えたビンを氷の中に挿し込むと、スタッフは一礼して部屋を出ていった。

松井はグラスを手にとると、麻友の前に差し出した。

「乾杯」

麻友もグラスを手に取り、静かに松井のグラスに当てる。グラスとグラスが触れ合う、高い音が部屋に響いた。

松井は一息で飲み干し、麻友はゆっくりと味わって飲んだ。

「私は、好きな気持ちにも応えませんし、割り切った付き合いもあるつもりはありません」

麻友が視線も合わせずにつぶやくと、松井は麻友をあらためて見つめてきた。

「相変わらず頑なだな。……以前に嫌な恋をしたとか？」

「すべて円満な恋愛と別れです。ただ、次にお付き合いする方とは結婚を考えています。面倒な女なんです」

多くの男は、付き合いよりも先に結婚をちらつかされると引いてしまう。麻友はそれを逆手にとってそう言うことにした。それを聞いて、松井は声を出して笑った。

「なるほどね。誤解があるようだけれど、私も同じだ。もう遊びをする歳でもない。次は結婚を考えている」

「本当とは思えませんね」

「……言ってくれるな」

互いに視線をあわせて、静かに笑った。

多分、本当のことを互いに言っている。でも、気持ちはどう動くかなんて本人にも解らない。今は相手の気持ちと、そして自分の気持ちを、互いに確かめ合っているようなものだった。

眠れない夜は

料理を口に運びながら、しばらく静かにお酒を飲んだ。
さすがに用意された料理は素晴らしいもので、口の中で美味しく
花を開くようだった。
シャンパンともよく合う。

また松井から話しかけてきた。

「聞かないのか？ 社長と何を話していたか」

振ってきた話題は、今日の本題。

麻友は手を止めて、松井を見つめた。

「話せない内容ですよね」

「まあな」

「だったら聞きません」

「……………じゃあ何で、今日は夕食と一緒に食べようと声をかけた」

松井は身体をすこし前に傾けてくる。口の端がすこしだけ笑っていた。

また麻友のことを試しているのだろう。ただ聞かれた内容は想定
の範囲内だ。

麻友は戸惑うことなく、松井に聞き返した。

「じゃあ何故あの時、私に声をかけようとしたのですか？」

あの時、確かに松井は麻友に何か語ろうとした。

それを心に押し込めたとはいえ、今も話を振ってきたのは松井の方だ。

話せない、けど話したい。そう思っているのは確かだろう。

そして、その内容はきつと重い。

麻友が軽々しく、聞きたい、と言える内容ではないことは解っていた。

「話すか話さないかは、取締役にお任せします」

判断を松井に任せ、麻友はにこりと微笑んだ。

渡したパスをどう返してくるかな、と麻友は想像していたが、松井は思わぬことを話題にしてきた。

「その笑顔に弱いんだ」

「……はい？」

「俺にとって、その笑顔が好みのストライク、ど真ん中なんだ」

松井が少しばかり恥ずかしそうに話し始めたので、さすがの麻友もわずかに頬を赤く染めた。

それにいつの間にか、松井の口調が「私」から「俺」に変わっている。多分、こちらが素の姿なのだろう。

「黒髪とか、抑えめの化粧とか、見下ろした時に見える長い睫毛と

かね。初めて会った時に、心を撃ち抜かれたような衝撃だった」

初めて会った時の反応が、まさかそんなことだとは麻友も想像していなかった。

――あえて抑えた格好に、まさか需要があるとは……失敗したな……。

そう考えつつ、麻友は思わず笑ってしまった。

松井にそう思われたことは嫌ではなかった。

「好きなんじゃないですか」

「まさかのロリコン疑惑に、自分でも戸惑っているんだ」

松井の言葉に、麻友は本当に声を出して笑ってしまった。

ロリコンと言われるほどの歳ではないが、差が離れていることは確か。

それでもまさか、そんなことを考えていたなんて。

「もつと仕事にも恋にも自信家かと思っていました」

「俺が？」

「はい」

「社長と話ただけで心配されるぐらいの、弱いところもあるさ」

松井はそう言って、お酒を飲み干した。いつの間にかシャンパンは無くなり、赤ワインに変わっている。相変わらず早いピッチで飲んでいる様子だが、松井が酔っているようには見えなかった。

酔ったの言葉なのか、酔っていない言葉なのか。松井はそれまでに隠していたはずの秘密を、独り言のように呟いた。

「俺と社長は親子なんだ」

麻友の顔から微笑みが消え、黙りこんでしまった。

まだまだ秘密を共有するほどの関係ではないと、麻友は考えていた。それなのに、松井は告白してきた。

「……………」

「誰にも言ったことはない。……何で一周りも違う女に話してんだ、俺は」

松井は自虐的な苦笑いを浮かべる。

恐らく彼にしても、麻友に話をする気持ちは無かったのかも知れない。

でも、話したい気持ちが次第に膨らんで、壁を超えてしまった。その気持ちの変化を、松井も持て余しているようにも見えた。

「噂は本当だったんですね」

「まあね。いわゆる妾の子っていうやつだ。ありがちだろ？」

「それにしても、噂の信憑性がありませんでした」

「上手くやっていたんだろうね。俺が知ったのでさえ、成人してからだ。社長と母親と俺しか知らない」

今までずっと隠し通してきた事実。麻友はそのたった3人のなかに入ってしまった。

想像はしていたけれど重い事実、麻友は少しだけ夕食を誘ったことを後悔してしまった。

愛だの恋だのを確認し合う前に、伝えられてしまった人生の秘密。

それとも互いに心の底で信頼してしまったということ？

松井のつぶやきは続いた。

「俺が知っていることを解っているはずなのに、社長は一切その素振りを見せたことがない。いつだって社長と部下の会話だ。……こんな歳になって恥ずかしいが、今でも期待してしまうんだ。父親としての言葉が聞けるんじゃないかって」

それが疲れてしまった原因のひとつ。

期待したいしてしまうこと、そしてそれが叶うことのないと解つていても感じる失望。

誰も聞いていない、二人だけの時ぐらいいは見せてくれるのではないかと思ってしまうのは、ずっと父親がなく育ってきた人間が抱く思いとしては、きっと自然なこと。

「1、2年後には社長を交代する。そのための話し合いだったけれど、それ以上のことじゃなかった」

松井は椅子にもたれかかり、天井を仰ぎ見た。今は疲れていることをあえて隠そうともせず、その気持を表情に浮かべている。

「社長を任される、と言うのは、子供だから継がせたい、という意味ではないのですか？」

「恐らくそうだと思う。だけれども、言葉としては言われていない」

松井はため息をつきながら、言葉を続けた。

「会社も大きくなりすぎた。息子だから継ぐ、という時代じゃない。血縁ではなく実力で勝ち取った、という形にしたほうが、おそらく都合がいいのだろう」

そして、松井は実力も結果も残してきた。望むべき形が整のつたのだ。

誰もが納得をする円満の形なのに、ただ一人、松井は親子の絆で苦しんでいた。

「確かに、お金持ちになりたかった。実力でトップに立ちたい。若い時はそんな思いも少なからずあった。でも今となつては……手に入れたからかな……別の何かが欲しい」

別の何か……それは恐らく形ではないもの。

親としての言葉だったり、愛情のようなものを言っているのかも知れない。

松井が今まで秘密にしていたことを何故話す気になったのか、麻友は何となく理解した。

お金も手に入った。

地位も手に入れた。

でも、思っていたほど心を満たしてくれないことに、気づいてしまった。

そんな隙間に、麻友が現れた。

その何かを埋めるような存在ではないか、と松井は思い始めているのかも知れない。

「なあ、順序が逆で悪いが、遊びの気持ちじゃないから聞いて欲しい」

松井の瞳に艶が見える。

相手をその気にさせる、男の魅力だ。

「抱かせて欲しい」

声にまで熱がこもっている。

強い思いが麻友にまで響いてきた。

「この気持のまま、家で一人眠りたくない。お前を抱きたい」

こんな景色の前で、しかも二人きりで。

見惚れるほど端正な顔立ちの男性に言い寄られれば、だいたいの女性はほだされてオツケーするだろうな……と麻友はちよつとばかり身体がじんつとしながらも、どこか客観的に状況を把握することができた。

流されるべきではない。それに、そこまで相手に尽くす義務もない。

少しの思考の後、麻友は話し始めた。

「ここの支払い、割り勘という訳にはいかないですね」

思っくいもない麻友の返答に驚きつつも、松井は怒るように答ええた。

「当たり前だろ。女に払わせるわけが無いだろ」

その言葉に、麻友は二度三度うなずく。

「私、借りを作るのが嫌なんです」

「？」

「取締役が眠るまで、側に居てあげます。それで、貸し借り無しにしませんか」

「側に……」

松井は麻友の言っている意味を理解して、吹き出して笑った。

「いい大人が二人でベッドの側にいるのに、寝かしつけただけか……俺が襲う可能性は考えていないのか？俺の家に来た時点で、襲ったとしても罪としては問われないぞ」

松井の試すような口ぶりに、それでも麻友はにっこりと笑って答えた。

「解っていますよ。その時は……」

「その時は？」

「会社を辞めます」

「辞める？」

「はい、辞めます」

「それだけ？」

「それだけです。……それでも抱きますか？」

今度は麻友が問いかける番だった。

松井も麻友の言わんとしていることを理解した。

一時の寂しさを満たすだけならば、抱いてもいいですよ。でも、本当に欲しいものはそうじゃないでしょ？

松井も自分の気持を確かめると、ああ、と頷いた。

「本当だ。抱けない」

「理解してもらえたようで」

「しかしせめて、添い寝でもしてくれ」

松井の意外な甘えように、麻友は苦笑してしまった。

「子供ですか……寝るまで膝枕で手を打ちませんか」

松井が考える素振りをし、そして頷いた。

「……膝枕か……悪くないな」

「では交渉成立、ということだ」

男性の自宅へ夜中に行つて、「膝枕だけです」なんて誰が聞いても信じてはくれないだろう。

行かないことが一番の安全策、とは麻友も解っていたが……。

夕食を誘った時点でどこまで許すべきかを覚悟しつつ、考え続けていた。

相手の気持を確かめて、自分の気持を問いかけて。そしてたどり着いた結論だが、正解かどうかなんて、後になってみないと解らない。

そして振り返った時はきつと、あれで良かったと思うのだろう。

麻友は小さく息をついて、ワインを飲むことにした。

そんな、終わった話と思っていた麻友に、松井はもう一度聞き返してきた。

「でも、聞いていいか？　少しはセックスしたい、と思わなかったか？」

ワインを飲んでいた手を止めて、麻友はくすつと笑った。

「自信家の顔が出てきましたね。その方が、らしいですよ。……答えはノーです。女性にとって気持ちのいいセックスは、行為そのものでも技術でもありません。相手を欲しいと思う気持ちです」

「俺は欲しいけどな」

「私はそう思いません」

「残念だ。……本当に落としたくなってきた」

「私の好みではありませんので、悪しからず」

麻友はそう言って笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2261y/>

好きになるまでの時間

2011年11月24日12時57分発行